

5月 ちびっこの森通信 vol.84

令和6年5月1日

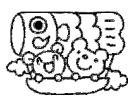
☆☆今月のテーマ☆☆

- ・生活の仕方を知り、園生活に慣れ安心して過ごせるようにする。
- ・友だちや保育者と一緒に過ごす楽しさを知る。



～今月の園内学習～

- ・足し算…9の段
- ・掛け算…9の段
- ・絵画カード…「出現」など
- ・声に出して読みたい日本語
- …「吾輩は猫である」夏目漱石ほか
- ・歴史カード…「中大兄皇子」ほか
- ・国旗カード…アジア地方
- ・地理カード…四国地方



～保育のポイント～

ダスティン・ホフマン主演の映画『レインマン』によって、よく知られるようになったサバン症候群。多くは自閉症でありながら、(自ら得意分野を発見し、驚異的な集中力により発達させた「記憶力」などの)知的分野や芸術分野で並外れた才能を生まれながらに示す人々を指します。一方、何らかの脳損傷を経験したあとに絵画や音楽、あるいは暗算などで際立った能力が出現した「後天性サバン症候群」と呼ばれる人々もいます。では事故や病気ではなくて人為的に脳を刺激するなどの方法で、普通の人でもサバンのような能力を後天的に出現させるのは可能なのでしょうか。この1つの解のコツは、両親の得意または不得意分野を含めた能力はそれぞれ60%の割合で遺伝し、得意分野を見つけた後の取り組みから(0～8歳までの)養育環境で集中的に取り組むことによりその能力をさらに40%伸長することができると言われています。例えば、鈴木メソッドと呼ばれる早期才能教室で当初の小、中学生の開始時期を4、5歳へと早めたことでお子さんのバイオリン習熟度の出来、不出来の差が改善されたそうです。このことから(同じ場合や違う場合がありますが)両親のそれぞれの得意とする能力がお子さんの最も得意とする能力と推定でき、それが分かった後はお子さんが喜び、自発的に集中でき、漠然としたものより具体的な目標をもって取り組むことによってその能力を伸ばすことに繋がると言えます。つまりは、サバン症候群のような脳力を発揮できる可能性に近づけるのではないかと思います。

～幼児教育と脳(澤口俊之著)～

第四章「いかに育てるか」より抜粋

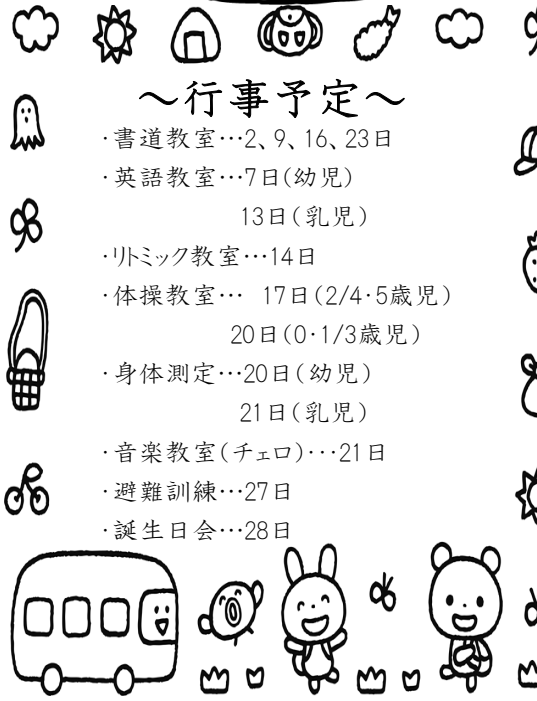


♪今月の歌♪

- ◇おかあさん
- ◆こいのぼり

～行事予定～

- ・書道教室…2、9、16、23日
- ・英語教室…7日(幼児)
- 13日(乳児)
- ・リトミック教室…14日
- ・体操教室…17日(2/4・5歳児)
- 20日(0・1/3歳児)
- ・身体測定…20日(幼児)
- 21日(乳児)
- ・音楽教室(チェロ)…21日
- ・避難訓練…27日
- ・誕生日会…28日



「ひよこ」と「りす」組だより



新年度より入園した園児は親元を離れてのはじめての集団生活に戸惑い、当初は不安な日々を過ごしていました。慣らし保育時間は当初は時間単位で小刻みに試して、慣れてくるとお昼ご飯を食べ、お昼寝をしたりと徐々にお家感覚で過ごすよう表情に笑顔が見えてきたのでホッとしているところです。桜をはじめとした春の花々の鑑賞や気持ちのいい外気浴で気分転換をはかり、室内ではお気に入りのおもちゃを見つけて遊べるようになってきました。これからのGWで暫しの家庭団欒から復帰した際、多少の混乱はあると思いますが、園ではみんなが安心して過ごすことができるように見守ってまいりますのでよろしくお願いいたします。



「きりん」と「こあら」組だより



昨年度の自分の姿を振り返るかのように、不安で涙する子たちを心配顔で見守るきりん組の姿には改めて成長ぶりが窺えます。みんなは自我確立も進み、言葉による声かけなどでコミュニケーションを取る姿や衣服の着脱も「自分でする」の意識から行動を起こそうとするところも立派だと感じています。一方、進級して2階へと活動場所が変わったこあら組は前年度にならし経験はしたものの、いざ本番となると今までと勝手が違うようで食事など戸惑いが見られるようです。ただ、月齢が上の子と一緒に過ごすことで刺激も多く、これから吸収して本領発揮できるようになるのも間近かもしれません。よく見守っていきたいと思います。



「ひつじ」と「ぞう」組だより



ひつじ組とぞう組へとそれぞれが進級していき、こどもたちなりに今までの立ち位置や行いをそれに合うように修正しようと頑張っている姿が見られます。昨年度の自分たちを見るかのように、新しい環境に戸惑っている新こあら組の子への声かけやケアしようとする優しい仕草が素敵なひつじ組のみんなです。仲良しよしの間柄ですが、まだ自分とお友だちの間合いの調整が必要などところが見られたり、行動の切り替えもしっかりできるように取組んでいきたいと思えます。園の年長者となったぞう組は就学期に向け、書道教室、絵の具や鍵盤楽器の取組みが目下の楽しみとなっているようです。身の回りのことなど、自立活動の仕上げをするのに加え、みんなの良い手本となれるようにお手伝いなど頑張っていけるように見守っていきたいと思えます。



給食だより

～好き嫌いは成長の証、その克服方法は？



こどもの健やかな成長を願うが故に離乳食から幼児食へと移行する頃、お子さんに見られる好き嫌いに頭を悩ませる保護者の方が多いのではないのでしょうか？そして、お子さんに「いろんな食材を残さず食べて欲しい」や「好き嫌いは克服させたい」と思うあまりに、無理強いをしがちな場面がないとも限りません。まずは、お子さんがそうなる原因をいくつか理解した上で対策を考えていく必要があります。まずは、自我の芽生えと口の機能の発達が好き嫌いを生じさせる要因と言えます。離乳食は(生後5～6ヶ月)のゴックン期、(同7～8ヶ月)のモグモグ期、(同9～11ヶ月)のカミカミ期に(同12～18ヶ月)のバクバク期を経る中、最初の(ゴックンなどの)食べ物の通過点から咀嚼が始まるのに伴い、大人以上に舌の味センサーが敏感な時期ですので母乳やミルクで馴染みのある甘味は別として、基本的な味(甘味、塩味、酸味、苦味、旨味)の内、自然界で腐敗を感じさせる酸味や薬物イメージの苦味は敬遠しがちとなります。ですから、こどもたちの防衛本能からそれらの味覚が強い葉物野菜などを「ベッ！」と吐き出すのはよく目にする光景となっています。また、食べることを強いられたり、食べて腹痛や嘔吐に陥ってしまったり、その食材が嫌いになる「食物嫌悪学習」という現象も指摘されているところです。園における好き嫌い克服の強みは、何と言ってもみんなで食べる機会から「自分も食べてみようかな…」というきっかけに繋がりがやすいことや保育従事者がこどもの様子を見ながら「一口だけ食べてみない？」と声かけして誘導することができることです。そして、食べられたら「かっこいい」や「すごいねえ～」とこどもが前向きになれる言葉かけでさらに食べる方向へと導くようにしたいと思います。園児へのこのような地道な取組みで徐々に好き嫌いを克服できるようにしていきたいと思えます。お家でも出来ることは試してみたいいただき、車の両輪のようにして克服ができるのを願っています。